

# ソグディアナの都市を探る

## —ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2025年度)—

村上 智見 東北芸術工科大学・准教授

ベグマトフ・アリシエル ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー・研究員

サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所・研究員

アリモフ・ナヴルズ サマルカンド考古学研究所・博士後期課程

ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員

寺村 裕史 国立民族学博物館・准教授

宇野 隆夫 帝塚山大学・客員教授

末森 薫 国立民族学博物館・准教授

## Exploring Urban Centers in Sogdiana: Excavations at Kuldor-tepa in Uzbekistan (2025)

MURAKAMI, Tomomi Associate Professor, Tohoku University of Art and Design

BEGMATOV, Alisher Research Scholar, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences.

SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

ALIMOV Navruz PhD candidate, Samarkand Archaeological Institute

BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

TERAMURA Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology

UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

SUEMORI, Kaoru Associate Professor, National Museum of Ethnology

### 1. はじめに

本プロジェクトでは、シルクロードの国際商人として活動したソグド人の歴史と文化の解明を目的に、「米国(マイムルグ)」の中心都市に比定される可能性が指摘されている地域を対象として、2022年度よりクルドル・テパ遺跡、2023年度以降からはクルドル・テパ遺跡において発掘調査を実施している。これまでの調査により、城壁外南西部のトレンチ⑧において6~8世紀初頭頃にさかのぼる寺院跡が確認され、その下層からさらに古い時期の建築遺構が存在することが明らかとなってきた。

本稿では、2025年度に実施した発掘調査の成果をもとに、6~8世紀の寺院に先行する建物の構造とその特徴、これに伴う出土遺物および壁画資料について報告し、後期寺院以前の建物の性格について検討する。

### 2. 遺跡の概要

クルドル・テパ遺跡(39° 29' 38" N, 67° 10' 10" E)は、サマルカンド州南東部ウルグット地区北西に位置する、サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)から約25 km離れた都市遺跡である。長方形の城壁に囲まれたシャフリ

スタンと突出する円形シタデルからなり、確認されている範囲で総面積は約17 haに及ぶ。城壁外には複数の円形テパが分布し、かつての市街地を構成していたと考えられる(村上ほか2025)。本調査の対象は、シャフリスタン城壁外南西部に位置する円形テパであり、旧ソ連期以降、断続的に実施されてきた発掘調査におけるトレンチ番号を継承して、本地点はトレンチ⑧と呼称している。これまでの調査の結果、上層の寺院の下から、さらに古い時期の建物の痕跡が確認された。

### 3. 2024年度までの調査

2023~2024年度のトレンチ⑧発掘調査では、6~8世紀初頭頃にさかのぼる寺院跡と推定される壁画を伴う建築の全体像を把握することができた。奥室(Room 1)は、当該地域および当該時期における建築的特徴に基づき内陣であることが判明している(図1; Begmatovほか2025)。

2024年度には寺院建設以前の層位解明を目的として、内陣およびその東側に位置するホール(Room 2)内に小規模なトレンチを設定し調査を行った。その結果、6~8世紀の寺院に先行する構造の異なる遺構の存在が確認され、主に4つの建設段階が認められた。



図1 前期寺院の検出状況

特に5世紀頃と推定される段階においては、日干しレンガ造の長方形構造物2基とそれに伴う通路状構造物が検出され、表面には漆喰層および壁画痕が残存していた。これらの遺構は後期寺院建設時に埋め戻され、基礎として利用された様子が明らかとなった(村上ほか2025)。

#### 4. 2025年度の調査結果

2025年度は、トレンチ⑧において確認された6~8世紀の寺院建設以前の遺構を包括的に解明し、その機能を明らかにすることを目的に、2024年度調査において確認された寺院床面を掘り下げた。その結果、以下の主要な成果が得られた。

- ①現存する寺院に先行して、構造の異なるより古い時期の寺院が存在していた。
- ②前期寺院の内陣および祭壇室とその奥部祭壇の位置は、後代の寺院とほぼ同一であった。
- ③出土貨幣や壁画資料に基づき、前期寺院は5世紀頃の可能性が高まった。
- ④前期寺院以前にも類似遺構があり、火災の痕跡がみられた。

前期寺院の内陣部全体については、今後の調査によるさらなる検証が必要であるが、特筆すべき点として、前期寺院からも壁画や金属製装飾品が確認されたことが挙げられる。

発掘にあたっては、後期寺院の構造を可能な限り良

好な状態で保存することに配慮しつつ、前期寺院に属する遺構の構造および機能の解明を進めた。その結果、後期寺院のホールにあたるRoom 2の床面下から、南北に対称的に配置された2基の長方形基壇が検出され、その全体像が明らかとなった。側面に壁画を伴うこれらの基壇の存在から、前期寺院が後期寺院とは異なる構造を有していたことが判明した(図1)。

基壇西壁面の壁画は下部が比較的良好に保存されており、文様の一部を判別することができる。一方、通路側に位置する基壇①の北面および基壇②の南面はほとんど失われているものの、残存する断片から、これらの面にも西壁面と同様の文様が描かれていた可能性が高いと考えられる。

内陣は後期寺院と同じ位置にあることから、前期寺院の内陣および祭壇の位置は、後代の寺院建設に際しても継承されていたことが明らかになった(図2、図3)。

#### 4. 壁画

壁画はRoom 2の南北壁および基壇において確認された。彩色は白色をベースとしているが、下部には赤色系顔料によって帯状の区画が設けられ、区画内には縦線および斜線による文様が描かれている。また、帯の上下には黒色顔料による三角文様が配されている。

壁画上部は、後代の寺院建設時に除去されたと考えられ、その多くは残存していないが、Room 2北壁の一部が確認された。同部位においても、黒色顔料による連続した三角文様および赤色顔料の帯が認められる。これらの文様はいずれも抽象的であり、具体的なモチーフは不明であるが、色彩および文様構成と類似する壁画が、パンジケント遺跡シタデル北部周辺からも確認されており、「アコーディオン文」と称されている(Zherve 2016)。なお、後期寺院からは7世紀頃と推測される青色顔料で彩色された壁画片が出土しており、前期と後期における使用顔料の変遷や技法の違いが伺える。

これらの壁画は鮮やかな色彩を保持しているものの、非常に脆弱であり、発掘時には顔料が埋土へ転写し剥離する状況が確認された。さらに、植物の根が壁画のほぼ全面に張り付き、動物による営巣に伴う破壊も認められるなど、動植物による被害も顕著であった。このため現地保存は困難と判断し、壁画の剥ぎ取りを実施した。剥ぎ取りにはパラロイドB72を用いて表面を硬化させた後、ガーゼによる裏打ちを行い、支持板



図2 前期・後期寺院の祭壇(上から)

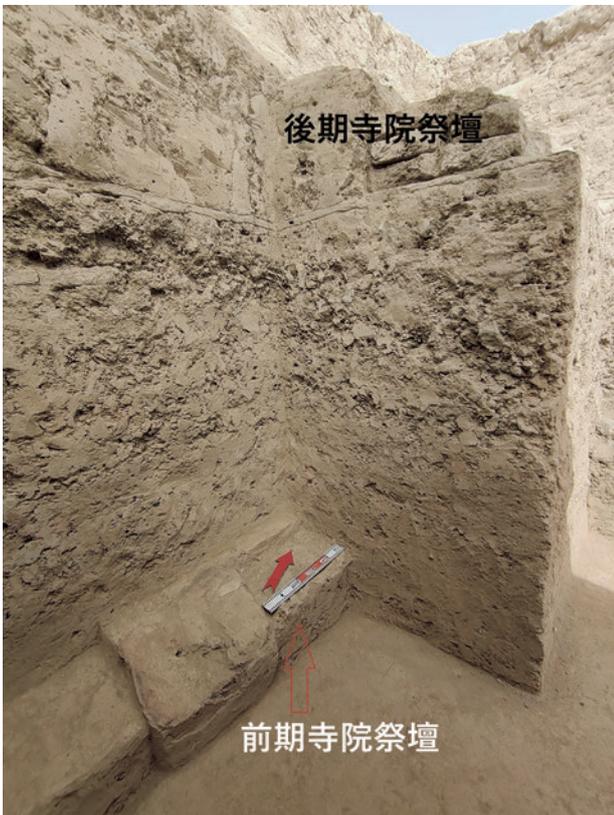


図3 前期・後期寺院の祭壇(南から)



図4 基壇西壁の壁画

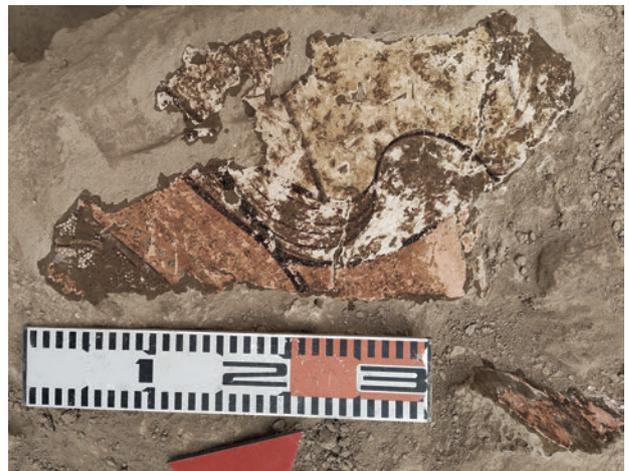


図5 祭壇付近出土の壁画片



図6 銅貨オックルト・チャムック(左：表、右：裏)

を当てて研究所へ搬入した。現在、保存修復および顔料分析を進めている。

## 5. 出土遺物

特に着目すべき貨幣、金製装飾品について述べる。

### 4-1. 貨幣

貨幣は計4点出土しており、うち1点は銅貨(図6)、3点は銀貨(図7・8・9)である。銀貨はいずれも前期寺院の奥部通路から出土し、「サマルカンドの射手」

と称されるセレウコス朝アンティオコス貨の意匠を模倣した伝統的なサマルカンド型に属する。これらは一般に4~5世紀頃に位置づけられるが、前期寺院に伴う他の出土遺物を総合的に考慮すると、本寺院の造営時期は5世紀頃とみるのが妥当と考えられる。今後の詳細な分析により、より確実な年代決定が期待される。

一方、銅貨は後期寺院の床面直下から出土しており、7世紀頃のソグド王による発行とされることから、7世紀に行われた床面の修復または改修に伴うものであ



図7 銀貨サマルカンドの射手2(左：表、右：裏)



図8 銀貨サマルカンドの射手2(左：表、右：裏)



図9 銀貨サマルカンドの射手2(左：表、右：裏)

る可能性が高い。

#### 4-2. 金製装飾品

四弁花文形金製装飾品(図10)およびハート形金製装飾品(図11)が出土した。四弁花文形金製装飾品の中央には、粒金細工で囲まれた赤色貴石が象嵌されている。ハート形金製装飾品の縁部には、打ち出しもしくは押し出し技法による斑点文様が施されている。また、四か所に穿孔が認められるが、劣化が著しいため意図的なものか否かの判断は困難である。糸を通した装身具、あるいは布製品などに縫い留め使用された可能性もある。

四弁花文形金製装飾品は、銀貨と同一地点・同一層位の内陣奥部通路から出土しており、ほぼ同時期に製作されたものと考えられる。本装飾品は、前期寺院の内陣など重要な空間に安置されていたものが、寺院破壊時に散乱した結果として出土した可能性がある。な



図10 赤色貴石象嵌の四弁花文形金製装飾



図11 ハート形金製装飾

お、金製品以外にも貴石が出土している。

#### 6. おわりに

2025年度の調査により、後期寺院に先行する前期寺院の存在が明らかとなり、内陣および祭壇配置は後代に継承されていた可能性が示された。また、前期寺院以前の建物が被熱を受けていることが判明した。不慮の火災によるものか、あるいは外部からの攻撃によるものかの判断は難しいものの、火災を経て壁を塗りなおしたことがうかがえる。本遺跡では異なる時代の寺院が重なり合って確認されており、各時期の寺院構造や機能を比較検討できる貴重な事例となった。

さらに、前期寺院に伴う壁画や貨幣、金製装飾品などの出土により、5世紀頃にさかのぼる宗教施設の具体像がより鮮明となった。これらは、当該寺院が宗教施設として社会的にも重要な役割を担っていたことを

示唆するものである。今回の調査成果は、イスラーム以前の中央アジア文化の理解を一層深める重要な資料を提供するものである。

隋・唐代の漢文史料には、米国(マイムルグ)および米国出身者とみなされる「米」姓のソグド人が頻出するが、本プロジェクトによる近年の考古学的成果を踏まえ、その中心地が当該遺跡であった可能性が指摘されている。今後の継続的な調査により、本遺跡の歴史的な位置づけとソグド人社会の実態解明がさらに進展することが期待される。

本研究は、JSPS 科研費 23K00928、JP23K25400、およびクリアハンドレル・イゴル氏の支援を受けて実

施したものである。記して感謝申し上げます。

#### ■参考文献

- ・村上智見, ベグマトフ・アリシエル, サンディボエフ・アリシエル, アリモフ・ナヴルズ, ベルディムロドフ・アムリディン, アスラノフ・アブデュヴァリ, 寺村裕史, 宇野隆夫, 末森薫, 押鐘浩之(2025年)「ソグディアナの都市を探る—ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2024年度)—」『第32回西アジア遺跡調査報告会報告集』145-148頁 日本西アジア考古学会。
- ・Begmatov A., Murakami T. and Sandiboev A. 2025. Discovery of a Temple at Kuldor-Tepa in Uzbekistan. *Asian Review of World Histories* 14(1): 5-25.
- ・Zherve, M. 2017. Restavratsionnye raboty na gorodishche drevnii Pendzhikent v 2016 godu. In P. Lurje (ed.), *Materialy Pendzhikentskoi arkhologicheskoi ekspeditsii*, Vol. 21, 39-40. Saint Petersburg.